教育かわら版
こんにちは教育委員会です ふたたび

No.１５３
令和３年４月２３日発行
今金町教育委員会の会
文責：教育長　中山秀悦

希望と緊張感を持って

桜の便り。温もりを感じる柔らかな風。遠くの山に見える残雪はまだ凛とした気高さも感じさせる。良い季節が来ました。でもワクワク感がないのはコロナ禍の中にあるという思いからでしょうか。

この状況。皆が元気を失いかけ、閉塞感さえ持ち始めている時期にあっては「やれる！」「できる！」と行政が希望を持つことが第一なのだと考えてきました。
もちろんそこに高次なエビデンスを持ちながら。
腹を決める。　『覚悟』。その二文字です。
「やる覚悟」と「無理だと見極める判断力」。納得し、悔いのない決断を。
何よりも必要なのは、考えを持った上での情報収集。都合の良い情報も悪い情報も受けとめて。



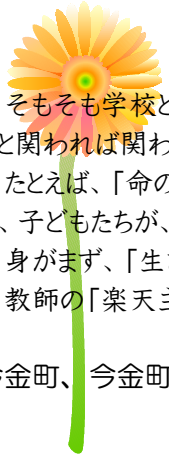
少し前の文章ですが、ずっと自分の心に残っている文章があります。

○　実は、学校で絶対にコロナウイルスに感染させないようにすることは可能である。それは学校教育をしないことであり、学校の機能を放棄することに繋がる。
　感染防止対策を金科玉条のごとく掲げ、半年以上も先の運動会、学芸会、研究授業、研究発表会、移動教室といった行事全てを中止にする学校がある。それによって感染防止という管理的な目標は達せられるであろう。
　しかし、このような中でも、形や人数、場所や時期を変え、完全でなくても開催することはできないかと、最後まで機会をうかがい、最善を尽くす学校もある。たとえ結果的には中止になったとしても、明らかに人と人の関係を保とうとする姿勢があり、まさしく教育的である。

コロナジレンマ　立正大学社会福祉学部准教授　石橋昌雄
（元　公立小学校長）

○　非常にオリジナルな仕事をしている人たちというのは、ほとんど例外なしに楽天主義者ですよ。オプティミストですよ。とにかく、何かあるとすぐ“できるに決まっている”という人ですよね。ところが、たとえば何か難しい問題があると、“できないに決まっている”というような人がいるけれども、そういう人はたいてい驚くほどオリジナルな仕事をしないですね。楽天的な人は、まだ十分わからない段階でも、最初に“できる”と思ってやり出す。

数学者・広中平祐『日本を語る』



○　そもそも学校とは、若いエネルギーと可能性に満ち溢れた楽しい場である。教師が、明るく、楽しく子どもたちと関われば関わるほど、学校はもっと「元気」になるはずだ。
　たとえば、「命の大切さ」を教えるためには、生と死の問題、自殺の問題と向き合うことは大切である。けれども、子どもたちが、「生きるって楽しい」と実感しなければ、「命の大切さ」は伝わらない。そのためには、教師自身がまず、「生きるって楽しい」を実感する必要がある。
　教師の「楽天主義」は、教育を変えることが「できる」。　武蔵野大学教授　貝塚茂樹

今金町、今金町教育委員会は覚悟を持って頑張ります。どうぞよろしくお願いいたします。